

臨床倫理学入門コース実施報告（佐藤恵子）

「京都大学を拠点とする領域横断型の生命倫理の研究・教育体制の構築」プロジェクトでは、京都大学大学院文学研究科応用哲学・倫理学教育研究センター（CAPE）の協力のもと、臨床倫理学に関する教育プログラム（臨床倫理学入門コース）を2018年8月2・3日に京都大学大学院法学研究科の会議室にて開催しました。

今年で4回目となる本コースの目的は、臨床上で難しい問題に遭遇した際に、「患者の利益を守るのに必要なことを考える、適切な方策を立てる、それを実現する戦術や技術も考えて実践する」ために必要な知識やスキルを身につけることです。臨床倫理の問題解決を支援する部署を有する施設はまだ数少ないですが、臨床で日々起きている問題は、その場にいる医療者が気づき、適切な方策を考えて行動できれば何とかありますので、これらの技能を身につけた人を増やし、院内で臨床倫理コンサルテーションや臨床倫理委員会を運営することのお手伝いできればと思っています。

教育プログラムは前回と同様で、倫理学や法学の基礎知識、臨床倫理コンサルテーションの考え方や運営の実際、インフォームドコンセントやACPの理論と実践、治療の無益性とは何かに関する講義ならびに、2つの事例についてグループディスカッションにて検討することで構成しました。1日目の事例は、進行期のがん患者に家族がエビデンス希薄な治療を申し出たときどう対応するか、2日目の事例は、事前指示書を記載している終末期の患者の生命維持治療をどうするか、というかなり難しい内容を取り上げ、受講者にはグループに分かれてもらい、臨床倫理コンサルテーションチームとしてどう考え、どう助言するかについて検討してもらいました。

受講者は関西圏に限らず、日本各地から34名、医療者は、現場の第一線で活躍する方はもちろん、地域や病院で指導的立場にいる方々や事務担当者まで、学生さんも哲学・倫理学・法学等の各領域の学部生から大学院生まで、多彩なメンバーが集まりました。講師も、児玉聡（文学研究科）、服部高宏（京都大学国際高等教育院）、松村由美・佐藤恵子・竹之内沙弥香（医学部附属病院）、門岡康弘（熊本大学）、ファシリテーターには大庭弘継・立場貴文（文学研究科）、深川良美（医学部附属病院）、鈴木美香（iPS細胞研究所）と複数領域から参集いただき、文理融合の学際的な講義を提供することができました。

グループディスカッションや全体の討議、懇親会でのおしゃべりも活発に行われ、これも受講生の熱心さと、問題意識の深さによるものと感じております。受講者の方々からは、いろいろな立場の人から異なった意見を聞いたり、意見交換することができてよかった、現場から離れて日々の業務を原理・原則の部分から見直す機会となったなど、総じてよい評価をいただき、「想像以上の収穫でした」「応用コースもぜひ企画してください」などのお言葉も頂戴し、オーガナイザーとしても、ちょっぴりいい気になりました。受講生の中には、病院での臨床倫理コンサルテーションの運営や臨床倫理の勉強会などに関わっている人もおり、臨床倫理の問題のガバナンスに関するニーズが高いことをお聞きし、今後、これらについても何らかのモデルを提案したいと思いました。また、このセミナーが核となり、受講生のみなさんが連携してよい知恵を出し合ったり、協力できたりするプラットフォームや、寝ころんで読めるような教材を作ることができればよいなど妄想は広がるばかりです。

2日間とも、外は体温を超えるような気温でしたが、熱心に参加して下さった受講生のみなさん、事前の企画・準備から当日の運営までお世話くださったスタッフのみなさんのおかげで、大変充実したセミナーになりました。心より御礼申し上げます。

佐藤 恵子